

I 研究主題

喜界島の伝統文化に誇りをもち、受け継いでいこうとする 児童を育成する教育課程の創造

II 主題設定の理由

1 社会の要請

グローバル化や人工知能などの技術革新が急速に進む中、アイデアや知識、人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性が増している。また、日本人が海外へ出て異なる文化に触れる機会や日本を離れて国際社会で活躍する場面も増えてきている。

このように、これからの時代には、国際社会の一員として生きる日本人としての自覚とともに、郷土や我が国の「伝統と文化」を大切にすることをますます重要になっている。

そこで、子どもたちに、まず自分たちの身近に過去から大切に受け継がれてきた郷土の伝統文化があることに気付かせ、体験を通して理解を深めさせ、そのよさを感じさせることが大切であると考え。そのようにして自分たちの郷土の伝統文化に誇りをもち、郷土に生きる一員として大切に受け継いでいこうとする子どもを育成することができるのではないかと考える。

2 学習指導要領より

教育基本法や学校教育法において、日本の伝統や文化に関する教育が重視されている。中央教育審議会答申においても、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力として、「日本人として大切にしてきた文化を積極的に享受し、我が国の伝統や文化を語り継承していけるようにすること」などが重要であるとされている。これらを受けて、新学習指導要領においてもその教育内容の充実が図られたところである。

また、今回の改訂では、社会に開かれた教育課程がキーワードとなっており、地域社会と連携したカリキュラムの開発、教科等横断的なカリキュラム等のカリキュラム・マネジメント、その指導方法の工夫・改善が求められている。

そこで本校では、「伝統や文化に関する教育」（以降、「伝統文化教育」とする）について、地域や関係機関・団体等との連携を深めながら、教育資源を生かし、教科等横断的な視点で教育課程を見直し編成していくことが必要だと考えた。そうした教育課程に基づいた授業改善により、地域の伝統文化を大切に受け継いでいこうとする児童の育成ができるのではないかと考える。

3 児童の実態

本校では、主に4年生の総合的な学習の時間にシマ唄・シマゆみた（喜界島の方言）を郷土素材として取り入れた活動を行ってきている。また、運動会では、毎年全校で地域に伝わる「八月踊り」を踊るなど、地域の方の協力を得て、伝統文化に親しむ活動の充実に努めてきた。

しかし、子どもたちは喜界島に存在するたくさんの伝統や文化の貴重さに気付いておらず、それらを活かしてきていない。また、学校で行う伝統文化の活動も単発的な活動になっていることは否めず、一時的な興味は示すが、持続性は弱く、大切に守り、受け継いでいこうという意欲までには繋がっていない。

そこで、地域の方や関係機関・団体等との連携を一層図り、より興味をもって伝統文化に対する理解を深め発信する指導法の工夫や、教科・領域等での横断的な指導等について実践研究を通して明らかにし、主題に迫りたい。

Ⅲ 研究の仮説と研究の内容

1 研究の仮説

地域の方や関係機関・団体等との連携を一層図り、発信する指導法の工夫や教科等横断的な指導等について実践研究を通して明らかにし、子どもたちがより興味をもって伝統文化に対する理解を深めることができるようにするため、以下に示す二つの柱の下、仮説を立てることとした。

(柱1)「社会に開かれた教育課程の実現に向けて」

仮説1 伝統文化教育の全体計画や年間指導計画を作成し、教科等横断的な視点で系統的に指導を行えば、教職員の伝統文化や地域に関する意識が高まり、資質・能力を確実に育成することができるであろう。

仮説2 学校の取組を積極的に公開し、PDCAサイクルの機能化を図れば、地域の理解や協力への意識も高まり、学校と地域が参画しての伝統文化教育が推進されるであろう。

(柱2) 郷土のよさに気づき、受け継いでいこうとする児童の育成

仮説3 方言や八月踊りを体験的・探究的に学べる学習内容を系統的に位置付ければ、地域のよさに気づき、理解を深め、地域に誇りをもつ児童を育てることができるであろう。

仮説4 地域との交流学习を計画的に位置付け、島民の思いに触れながら学習を展開すれば、伝統文化を継承していこうとする児童を育てることができるであろう。

2 研究の内容

(1) 教育課程の見直し改善

- 指導内容及び方法の工夫改善に伴う見直し
- 教科・領域における横断的な指導の工夫
- 伝統文化に関する指導の体系化

(2) 地域及び関係機関・団体等との連携体制の在り方

- 地域と連携・協働したPDCAサイクルの確立
- 地域人材を活用した連携体制の構築及び指導法研究

(3) 指導法の工夫改善

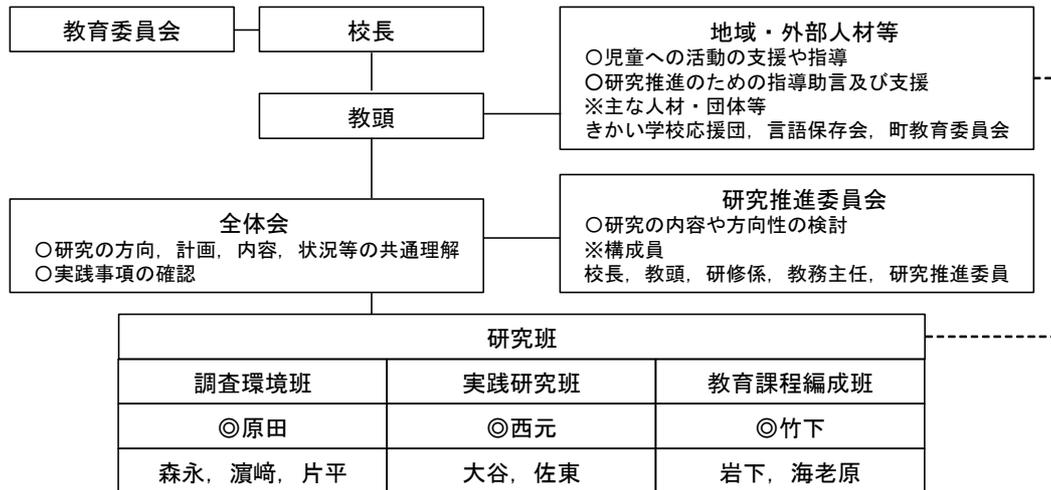
- 興味をもたせる導入及び取組の工夫
- 伝統文化に対する理解を深め発信するための指導法の工夫
- 学校と地域のつながりの深化を図る取組

(4) 伝統文化に関する実態調査と分析・考察

- 児童・保護者・職員・地域の意識及び実態調査
- 結果分析と課題把握

◇ 研究組織図

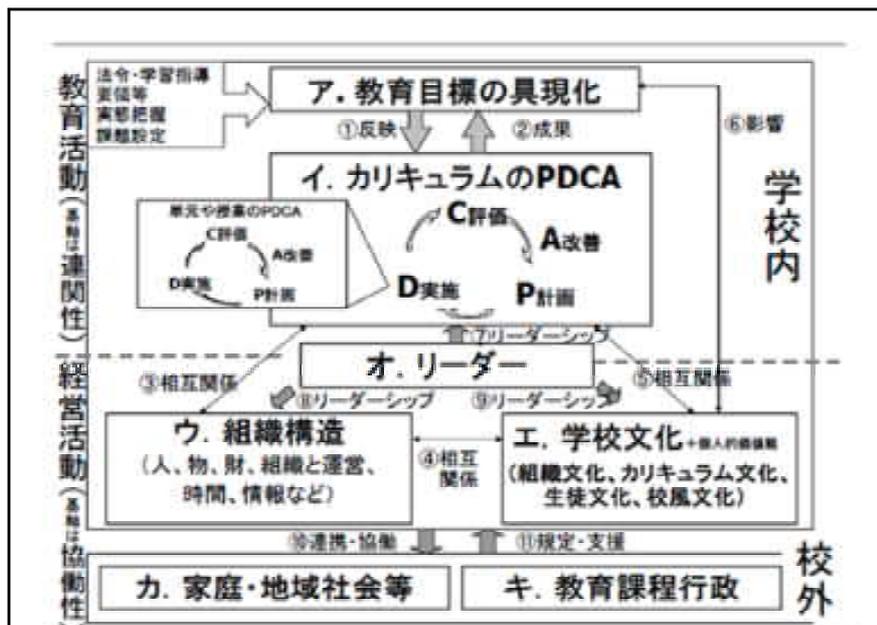
本研究を推進するにあたり，研修の見通し・共通実践等を全職員の理解による協働が図れるように外部機関を含む組織の体制づくりを行った。



<図 1>

◇ 研究構想図

本研究では，社会に開かれた教育課程の実現を通じて，「喜界島の伝統文化に誇りをもち，受け継いでいこうとする児童」の育成を目指している。その方策として<図 2>に示している「カリキュラムマネジメント・モデル図（田村）」を基にすることにした。



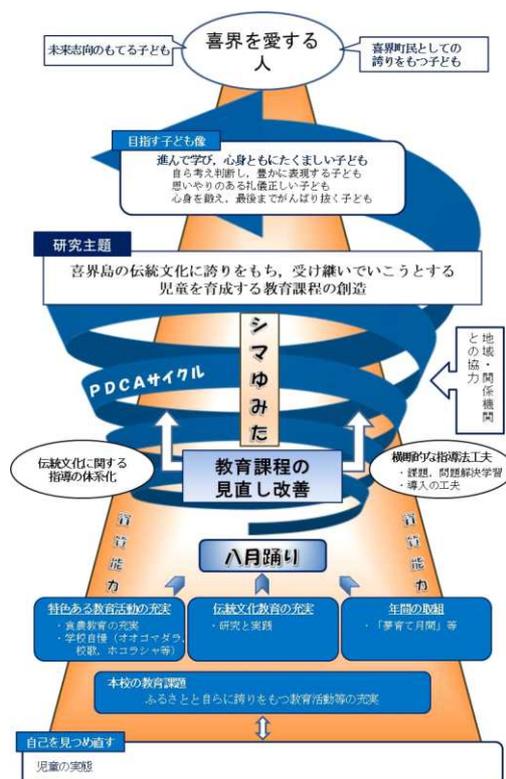
<図 2>

カリキュラム・マネジメントについては、以下の三側面から捉える。

- 1 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- 2 教育内容の質の向上に向けて、子どもたちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
- 3 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて利用しながら効果的に組み合わせること。

これらの3側面を基に本校の実態に応じて、以下の研究構造図を作成した。

〈図3〉



〈図3〉

シマゆみたや八月踊りを地域と一緒に取り組みながら連携を深め、地域と学校が「地域愛に満ちた子どもの育成」という同じ価値観で未来志向のもてる子どもを育成し、さらに、喜界島を愛する人に育てていくよう取り組んでいく。

本校が目指す「喜界島を愛する人」は、以下のような人である。

- ・ 社会的・職業的に自立した人間として、我が国や郷土が育んできた伝統や文化に立脚した広い視野を持ち、人生を切り拓いていくことができる人。
- ・ 対話や議論を通じて、集団としての考えを発展させたり、他者への思いやりを持って多様な人々と協働したりしていくことができる人。
- ・ 変化の激しい社会の中でも、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決につなげていくことができる人。

IV 研究の実際

1 教育課程の見直し改善

(1) 指導内容及び方法の工夫改善に伴う見直し

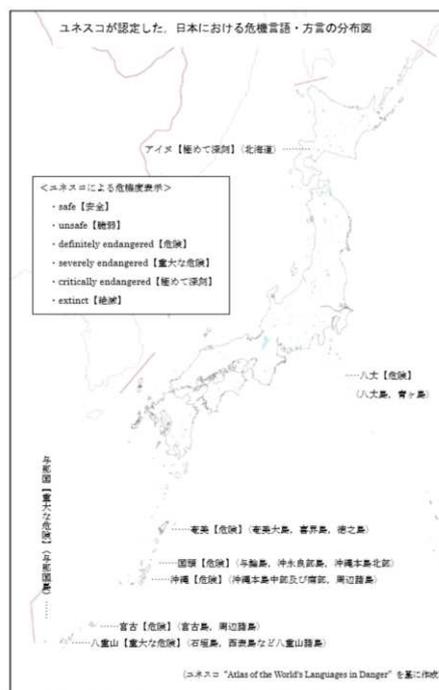
本校は、大島群島の一つ喜界島にある小規模校であり、2009年にユネスコから発表された「消滅危機言語」の消滅危険に分類される「奄美語（奄美方言）」を語源にもつ学校である。〈図4〉

「島の方言＝シマゆみた（以後、シマゆみた）」に関しても総合的な学習の時間に位置付けて学習し、その成果発表の場として町が主催する行事に参加して、シマゆみたを取り入れた劇を披露してきた。しかし、内容として位置付けている学年は限られており、系統的な学び、全校での取組とは言い難かった。

また、これまでも、地域の特性を生かした特色ある教育活動を行ってきた。隆起サンゴ礁の島である喜界島の特色を生かした海洋教育の推進や日本一ともいわれる白ゴマの栽培・収穫・販売といった食農教育など、地域の住民や関連機関と連携を図った活動を行ってきた。そこで、これまでの取組を生かしつつ、学校全体で系統的に伝統文化教育を継続的に推進することができるように、伝統文化教育全体計画と年間指導計画を作成することにした。

全体計画の作成にあたっては、これまでの国立教育政策研究所が指定する教育課程研究指定校のものを参考にしながら、地域の特性と児童の実態を踏まえ伝統文化教育の目標を定めた。また、育てたい子どもの姿を発達段階に応じた到達目標で示すことで、学年間の系統を意識して取り組むことができるようにした。

年間指導計画については、各学年の教科における伝統文化教育に関連する単元を拾い出し、一覧表にまとめる形式にすることにした。しかし、本年度は、新学習指導要領の全面実施を前に教科書が変わることを考慮し、モデリングとして第4学年のみ指導計画の作成を行った。このようにして作成したものが資料1（伝統文化教育全体計画）、資料2（伝統文化教育第4学年年間指導計画）である。



〈図4〉

(2) 総合的な学習の時間の全体計画と年間指導計画の見直し

教育課程研究指定校として伝統文化教育の推進をすることに加え、2020年度より全面実施となる学習指導要領を踏まえ、本校にこれまであった総合的な学習の時間の全体計画と年間指導計画を全面的に見直し、総合的な学習の時間を通して育成を目指す資質・能力と各教科等で目指す資質・能力との関連を図った、新たな全体計画・年間指導計画を作成していく予定である。

2 地域及び関係機関・団体等との連携体制の在り方

(1) 地域の専門家や研究団体等と連携した指導法研究

ア 先進校との連携

8月30日、方言の話者を育てる取組をいち早く行った与論小学校とテレビ会議システムを使ったweb会議を実施した。与論小・吉田教諭と本校の教頭がプレゼンターを務め、会を進行した。予め、質問事項を用意し、それに答えながら吉田教諭が与論小のこれまでの取組の経緯や内容について話をしてくださった。与論の方言であるユンヌフトゥバで作られたカルタを始め、たくさんの掲示物や音読カードなど具体的な取組を示していただいた。今後の本校の実践のヒントになる物が数多くあった。

その中でも、やはり課題があることが取り上げられた。

- ①GTとの打ち合わせ時間の確保
- ②家庭環境等による取組への個人差
- ③家庭や地域と共通の価値観をもって取り組む必要性

これらについては「イ 言語研究者による研修」でも取り上げられている。



イ 言語研究者による研修（福岡教育大学：荻野千砂子准教授）

9月13日、喜界島言語保存会・生島常範氏の紹介で喜界島の言語研究を行っている福岡教育大学の荻野准教授を特別講師に迎え、職員研修を実施した。荻野氏は「ア」でweb会議を行った与論小学校の取組を以前より調査・研究されており、本校の活動を知り、協力をしてくださる運びとなった。「喜界島方言の継承活動への試案」と題した研修内容は以下のとおりである。

- ①学習指導要領での方言の位置付け
- ②ユネスコ「消滅危機言語」の発表
- ③地域との連携（実践例）今津小学校（福岡市）の「人形浄瑠璃」
- ④喜界島方言の位置付けと特徴
- ⑤実践の提案1 かるたの制作
- ⑥実践の提案2 教科の中での方言
- ⑦遊びと学びと

同じ「消滅危機言語」として指定されているアイヌ語では、神歌や詩が大切だとされ、アイヌ民族が日常生活で使っていた言葉に価値を見いださなかったことが、現在、継承活動の壁を作る元となってしまったようだ。「日常」こそ保存すべき宝なのだと荻野先生は語っていた。

また、地域との連携についても今津小学校の例をもとに、「地域と子ども

の間に学校が入り込む指導」ではなく、「地域が直接子どもに行う指導」の形が理想的である。地域愛をもたずして地域愛をもつ子どもは育たない。地域の方々へ協力を求める際に、この活動が地域愛に繋がる活動としての共通理解を図れるよう工夫したい。

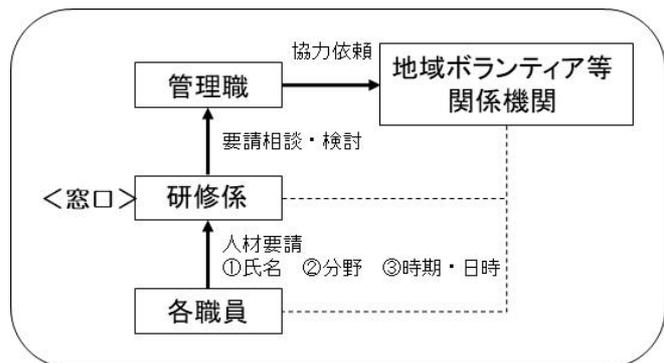


(2) 人材の確保と連携体制の構築

地域や関係機関・団体等との連携については「きかい学校応援団ボランティア活動」を活用することを原則とした。中には支援可能分野・教科・内容が記載しているので、それを確認の上、〈図5〉に示す流れで支援を申し込むことを職員全体で共通理解した。



タンメーラ。



〈図5〉

写真は、第4学年の総合的な学習の時間におけるシマゆみたの指導の様子である。クラスの児童が居住している集落の区長に相談し、紹介していただいた。事前に授業の流れや授業内容を打ち合わせ、一単位時間に身に付けさせたい力を共通理解して活動している。



3 指導法の工夫改善（八月踊りの取組）

本校では、毎年運動会で地域に伝わる「八月踊り」を踊っている。練習の際には、地域の方々に指導をいただき、本番でも一緒に踊りの輪に入っていたいでいる。しかしながら、これまでの様子は、踊りを見ながら踊り方を真似るといった活動で、実際に話をしたり触れ合ったりする交流までにはいたっていない。また、時数も少ないことから、八月踊りの由来や唄の意味など、十分な理解にいたっておらず、大切に守り継いでいこうという意欲までには繋がっていない。

そこで、子どもたちが八月踊りについての意味等を理解し、より一層地域の方々との交流を図りながらそのよさを感じ取り、八月踊りへの思いを深めて踊ることができるよう、活動の工夫改善を行った。

【八月踊りを学ぼう】学習計画（全3時間）

1 ねらい

- (1) 八月踊りに込められた意味や願いを知り、その歴史や伝統を守ろうとする意識を高めさせる。
- (2) 八月踊りを通して地域の方と交流し、方言や文化に触れる体験をする。
- (3) 踊る楽しさを知り、各地域の八月踊りに進んで参加しようとする意欲をもたせる。

2 対象児童 全学年

3 活動計画

地域人材活用○ 担任のみ△

学習のねらい	主な活動	職員	G T	時数	人材
1 「八月踊り」とはどんなものか知ろう。 (1) 八月踊りの特徴を知ろう。 (20分)  (2) 踊ってみよう。 (20分)	① アンケート結果を知り、シマゆみたや八月踊りに関心をもつ。 ② 自分のめあてを立てる。 ③ 歴史や由来、唄の歌詞や踊りの意味、決まりごとなどについて地域の方の話聞く。 ※時間があれば質疑応答 ④ 実際に踊ってみる。 ⑤ 地域の方と感想を交流する。	・児童アンケートの結果をもとに課題意識をもたせる。 ・地域の方を紹介する。 ・地域の方の補助をする。 ・隊形の指示を出す。 ・学習のまとめをする。	・代表が団体の紹介をする。 ・八月踊りについて話す。 ・児童の輪の中心で踊る。	予備 1 時数	○
2 八月踊りの練習をしよう	1～3年生	○ DVDを見ながら踊りの練習をする。		予 1	△

	① 4年生	○ DVDを見ながら踊りの練習をする。	総 1 △
	5・6年生 ※	○地域の方に教えてもらいながら 唄や太鼓の練習をする。 ○地域の方に教えてもらいながら 踊りの練習をする。	総 合 ○ 1
3 八月踊りの練習をしよう ②	○ 運動会の隊形になって全校で踊りの練習をする。 	・リハーサルを兼ね、隊形の指示等を出す。 ・これまでの学習を振り返らせる。	・輪の中心で唄と踊りをする。 体育 ○ 1

※部分は以下に活動計画掲載

4 留意点

- ・ 今年度の担当は、早町・塩道地区。毎年担当地区が変わり、唄も踊りも変わる。
- ・ 早めに担当者を把握し、学習の意図を伝え、地区の人材を掌握しておいていただく。
- ・ それぞれの担当者を招き、管理職も含めて3時間分の日程と計画を打ち合わせしておく。
- ・ 学校職員が地域での練習に参加できる場合は、参加しておく和交流がしやすく、踊りの指導にも活用できる。
- ・ 地域の方の様子を見ながら、適宜水分補給や休息等を入れて活動を柔軟にする。
- ・ 1～4年生の学級での踊りの練習には町作成のDVDを活用する。

※第2時の活動計画

(1) ねらい

- ・ 地域の方との交流を通して、塩道地区の「やいこらさ節」と早町地区の「どんどん節」それぞれのシマゆみたの歌詞の意味を知る。
- ・ 踊りを正しく習得したり、唄に興味を持った子どもはなるべく正確に歌ったりする。

(2) 対象学年 5, 6年生

過程	主な学習活動	時間	職員の動き	G Tの動き
つかむ・見	1 本時のねらいと活動の流れを知る。 2 自分のめあてを立てる。 (例) 唄にこめられた意味を知	5分	○ 本時のねらいと流れを説明する。(T1) ○ 地域の方に流れの詳細を説明	

通 す	り、もっと上手に踊れるよ うになる。		する。(T2)	
探 究 す る	3 学年ごとに分かれて、それぞ れの曲の歌詞の意味について知 り、踊りの練習をする。 ○ 5年生 「どんどん節」→「やいこらさ 節」 ○ 6年生 「やいこらさ節」→「どんどん 節」	一 曲	(T1・T2) ○ それぞれの学 年で、グループ を作らせる。	○ 地区ごとに分 かれ、担当職員 の指示を待つ。
	○ 5年生 「どんどん節」→「やいこらさ 節」 ○ 6年生 「やいこらさ節」→「どんどん 節」 	10 分 ず つ で 交 代	※ 地域の方の参 加人数によって グループ数は調 整する。 ○ ある程度話が できたら、輪を 作って踊り、細 かな足や手の動 きを習うよう、 子どもたちに指 示する。	○ 子どもたちの グループへ数名 ずつ入り、シマ ゆみたの話や踊 りの話などをす る。 ○ 子どもの輪の 中に入り、でき ていない動きを 教える。
ま と め る	4 全体で輪になって踊る。 ○ 歌ってみたい子にはマイクで 歌わせる。	10 分	○ 本時の仕上げ として、全体で 輪になって踊 る。	○ 子どもたちの 間に入って一緒 に踊る。
振 り 返 る	5 本時を振り返り、次時への意欲 をもつ。	5 分	○ それぞれ近く の方に自分の言 葉でお礼を伝え させる。	○ 近くにいる子 どもに声をかけ ていただく。

5 今年度の成果 (○) と課題 (●)

- 子どもたちが「やいこらさ節」と「どんどん節」を普段の生活の中でもよく口
ずさむようになってきている。
- 自分の地域の祭りに参加して、これまであまり踊っ
たことのなかった子どもも進んで踊るようになった。
- 自分の地域の唄や踊りとの違いに気付き、進んで話
題にするようになってきている。
- 地域の方自身が唄や踊りの再確認ができると喜んで
くださっている。地域の活性化にも貢献している様子が見られる。
- 歴史的なことや由来などについて、地域の方で講話ができる人材を確保するこ
ととその内容について、もう少し綿密に打ち合わせができれば良かった。
- 唄や踊りだけでなく、フリートークの時間を設けるなどして、地域の方との自
然な交流ができるようにしたい。
- 第2時に唄や太鼓の練習を行ったので、音楽科と関連させ、音楽の教科のねらいも
達成できるように改善したい。
- 第3時は、体育の授業として行った。体育科の表現領域の指導事項の「仲間との共
感的なコミュニケーションを大切にする」部分を意識した指導を行いたい。



4 伝統文化に関する実態調査と分析・考察

(1) 児童・保護者・職員・地域の意識及び実態調査

ア 実態調査の検討

本研究の成果と課題を検証するための一つとして、伝統文化に関するアンケートを実施することにした。

調査対象は、児童・教職員・地域・保護者とした。また、アンケートの内容については表にまとめてみた。8観点を設定し、それぞれの観点について細かな質問項目を作成した。さらに、研究を進める中で「愛校心」の観点を増やし、児童の意識調査を行いたい。本校の研究の仮説に対する取組の成果と課題をより詳細に検証していきたいと考えている。

調査対象	アンケート調査の項目
児童	「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学習への意欲・関心」 「愛校心」「郷土への誇り」
教職員	「知識・技能」「学習指導」「児童の様子」「地域とのつながり」 「学習への意欲・関心」
地域	「学習への意欲・関心」「児童の様子」「地域とのつながり」 「学校や教職員の取組」
保護者	「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「意欲・関心」 「郷土への誇り」

アンケート調査においては、児童の意識や変容を把握するために、取組が進んでからも実施をしたいと考えている。

なお、保護者、地域の実施前アンケートについては、集約途中の段階である。

イ アンケート実施のスケジュール

回	実施時期	実施の目的
1	令和元年 7月	伝統文化教育実施前の実態調査
2	令和元年 1月	伝統文化教育1年目の検証
3	令和2年 5月	伝統文化教育2年目の取組に向けての実態調査
4	令和2年12月	伝統文化教育2年目の検証

(2) 結果分析と課題把握

ア 考察まとめ（児童）

< 1・2年考察 >

- ・ シマゆみたの意味が分かる児童はほとんどいない。
- ・ シマゆみたが消滅危機言語であることについての理解も難しい。
- ・ シマゆみたを話せる児童もほとんどいない。
- ・ シマゆみたを話したいと思っている児童はいるが、今は覚えなくてもいいという回答があり、関心がないようである。
- ・ シマゆみたを話せるようになりたいと思っている児童は、その理由を祖母と方言で話したい、喜界島の人だから。生まれ育ったふるさとだからと述べており、郷土愛が感じられる。
- ・ 1年生は八月踊りを踊った経験がない児童がほとんどで、2年生は運動会での経験がほとんどである。
- ・ 八月踊りが生まれた理由については、ほとんどの児童が知らないようである。八月踊り保存会の活動については認識がない。
- ・ 八月踊りについての質問の④⑤⑥から、伝統文化という内容も理解が難しく、まだ大切さが認識できないことから、学ぶ意欲の低い傾向が見られる。（1年生）
- ・ 2年生においては、「上手になりたい。」「これからも続くから学ぶことは大切。」等々、興味・関心が高い。

< 3・4年考察 >

- ・ シマゆみたの意味が分かる児童は半数程度で、シマゆみたを話すことができる児童は20%程度である。
- ・ シマゆみたが消滅危機言語であることを知っている児童は10%程度で、シマゆみたが消滅するという認識はほとんどない。
- ・ ほとんどの児童がシマゆみたを話したいと思っている。また、残していききたいと答えている児童がほとんどである。
- ・ シマゆみたを残す必要がないと感じている児童は、シマゆみたを覚えるのは時間がかかると答えており、聞き慣れていないということも考えられる。
- ・ すべての児童がシマゆみたをもっと知りたいと思っており、学ぶ意欲が高いと感じられる。
- ・ 八月踊りを踊った経験がある児童は半分ほどで、あまり踊らないと答えた児童は運動会で踊った経験のみで、集落行事での経験がないようである。
- ・ 八月踊りは知っていても、八月踊りの唄の意味や由来については、ほとんどの児童が認識していないので、八月踊りがなぜ始まったのかを地域の方に教えていただく機会が必要である。
- ・ 「八月踊り保存会」の存在はほとんど知らないようである。
- ・ 八月踊りを残すことやもっと踊りたいと思う気持ちをほとんどの児童が思っており、八月踊りに対して意欲満々であることがうかがえる。
- ・ 集落行事などでみんなで踊った経験が楽しかったと感じている児童がおり、八月踊りを楽しみながら伝承していこうとする素地がうかがえる。

< 5・6年考察 >

- ・ シマゆみたの意味は分かるという児童がほとんどであるが、話すことができる児童は35%である。
- ・ シマゆみたが消滅危機言語であることを知っている児童は42%で、半分以上の児童が認識がない。
- ・ シマゆみたは、喜界島の伝統だから残していきたいと思っている児童がほとんどである。しかし、実際に今、話していないので必要性を感じていない児童もいる。共通語の方が分かる。
- ・ シマゆみたをもっと知りたい、シマゆみたを学ぶことは自分自身にとって大切であることを感じている児童がほとんどで、学びの場があれば取り組んでみたいと思っている。
- ・ 八月踊りはほとんどの児童が踊った経験がある。毎年運動会で取り組んできたからである。また、集落の島遊びで、八月踊りを踊ったり、見たりしているようである。
- ・ シマゆみたを話したいと思っていない児童は、シマゆみたを学ぶ必要はないと考えている。
- ・ シマゆみたの学習を進めていく中で、シマゆみたのおもしろさや、シマゆみたの価値、消滅危機言語であること等の意識が高められるような取り組みが必要になる。
- ・ 八月踊りの由来や保存会の活動等については、児童はあまり関心がないようである。
- ・ 八月踊りが喜界島の伝統的なものであることは理解されており、次の世代に残していかなければならないという意識も高い。
- ・ 八月踊りに対して消極的児童の中には、得意ではないし、あまり踊ったことがないからと答えてはいるものの、みんなと踊ったら楽しいと回答していたので、一体感を味わえるような取組が必要である。

< 全体考察 >

- ・ 学年が上がるに連れて、シマゆみたや八月踊りに対する興味・関心は高くなっていくことが分かる。
- ・ 学年が上がるに連れて、シマゆみたや八月踊りにをもっと学びたい、もっと上手になりたいという気持ちは高くなっていくことが分かる。
- ・ 学年が上がるに連れて、シマゆみたや八月踊りは残していくことは大切であると感じている。
- ・ 1年生はシマゆみたや八月踊りにはほとんど興味を示していないことから、学校教育の中で、意図的・計画的に伝統文化教育を取り入れることは、伝統文化伝承の効果が期待できる。経験を積み重ねることが大切であると考えられる。
- ・ 「昔のことだから、昔の人のものである」という考えを払拭し、今もなお使い、踊られているものであることを自覚し、児童が主体的に関わることができるようにすることが求められていると感じた。

イ 考察まとめ（教職員）

- 「シマゆみた」がユネスコの指定を消滅危機言語であることは知っているが、転勤により、初めて触れる「シマゆみた」や「八月踊り」であるため、その由来や意味について詳しく知っている教職員は少ない。
- 伝統文化教育の取組によって、児童の関心・意欲は高まってきていると感じているが、知識や問題解決のための技能が高まっているとは感じられないようである。
 - 「シマゆみた」や「八月踊り」の保存継承は大切であると感じているが、児童の地域の愛着が高まっているとは思えないと感じている教職員も多いことから、児童の地域での行事への主体的な参加が見られないことが考えられるのではないかと推測する。
- 児童が地域の方とどのような関わりをもっているのかを把握するためには、教職員と地域との交流も大切になってくると感じられる。
- 伝統文化教育を進める中で、地域の方々との交流を通して、児童も教職員も積極的に地域行事に参加し、また、伝統文化継承のための啓発活動を行えたことで、地域と共にある学校づくりの推進において有効と考えたのではないかと思う。
- 伝統文化教育の研究指定校になったことから、地域の方との連携が密になり、地域の方を知るきっかけとなった。
- 「シマゆみた」「八月踊り」の学習について今後も関わってきたいと感じている教職員がほとんどで、学校と地域を結ぶ大切な学習である。